

聖霊降臨後第10主日（特定14） 水の上を歩く意味

水のことを、ユダヤ人は「マイム」と言います。そして井戸を掘り当てた時の喜びを、イザヤ書12章3節「あなたがたは喜びをもって、救いの井戸から水をくむ」という言葉をもとにして、「マイム・マイム」というフォークダンスでも踊ったりします。祈祷書の25ページにもその言葉が出てきます。

砂漠で生活する人々にとって、水は命をつなぐための必需品です。

しかし、生活の必需品である水も、春に雨が降って、鉄砲水のように襲うことがあり、水は恐ろしいものだ、という理解も、ユダヤ人にはありました。

今日の旧約聖書は、神様の命令に背いて、船に乗って別の方向へ旅をしていた、預言者のヨナの話です。命令に逆らったヨナに、神様が嵐を起こして反省させます。ヨナは「わたしの手足を捕らえて海にほうり込むがよい。そうすれば、海は穏やかになる。わたしのせいで、この嵐があなたたちを見舞ったことは、わたしが知っている。」と言って、ヨナは乗っていた船から海に投げ出されます。そして、大きな魚に飲み込まれるのですが、今日の旧約は、その時の言葉です。

今日のヨナ書の4節から7節の途中まで、水の中でもがき、苦しんでいる人間の姿が描かれています。6節には「大水がわたしを襲って喉に達する。深淵に呑み込まれ、水草が頭に絡みつく。」

これは海での出来事というより、鉄砲水など、水の恐ろしさを語っている感じがします。どうもユダヤ人にとって、水というのは、飲み水は命を保つのに必要なのですが、海とか湖は、命を失うような恐ろしい所という印象があるようです。

毎年、夏になると各地で水の事故が起こって、台風の被害や、遊覧船の事故など見ていると、私たちもやはり水は恐ろしいものだと言えるでしょう。

しかし、神様はそんな恐ろしい水を支配されるようなイメージがあります。

たとえば、詩編77編20節で、「あなたの道は海の中にあり あなたの通られる道は大水の中にある。あなたの踏み行かれる跡を知る者はない。」

ヨブ記9章8節「神は自ら天を広げ、海の高波を踏み砕かれる。」

イザヤ書43章2節 これは神様が言われる言葉ですが。

「水の中を通るときも、私はあなたと共にいる。大河の中を通っても、あなたは押し流されない。」

シラ書24章5～6節「ひとりでわたしは天空を巡り歩き、地下の海の深みを歩き回った。」

神様が、大河や海を、ひとりで歩かれたり、人間と共におられたり、というイメージがあります。

さて、そんなことを頭に置いて、今日の福音書ですが、イエス様が水の上を歩いた、というお話です。そうすると、何となく、神様が、イエス様として具体的に姿を見せているんだ、みたいな象徴的な意味では、わかるような気がする、そんな物語に見えてきます。

しかし、その解釈は後回しにして、まずは、これは、本当に起こったことなんでしょうか？

注解書などを見ますと、この出来事は、マタイ、マルコ、ヨハネの3つの福音書に記されているお話で、どれも、先週読むはずだった、「五千人に食べ物を与える」というお話に引き続いて記されています。

五千人が満腹した話は、大切な出来事で、どの福音書にも記されているのですが、このイエス様が水の上を歩いた、というのも、みんなに知らせたい出来事だったのでしょう。

ところが、3つの福音書を比べてみると、だいぶ強調点が違うことに気づきます。

一番おだやかな表現をしているのは、ヨハネによる福音書で、弟子たちが舟に乗っていると、強い風が吹いて、湖が荒れ始めた。するとイエス様が近づいて来られるのを見て、弟子たちは恐れるのですが、「わたしだ。恐れることはない。」と言われます。弟子たちはイエス様を舟に迎えようとするのですが、まもなく、舟は目的地に着いた、という話です。

これが、マルコによる福音書になると、イエス様は弟子達に近づいて、通り過ぎようとされます。弟子たちはこれを見て「幽霊」だと思い、大声で叫びだす。イエス様は、「安心なさい。わたしだ。恐れることはない。」と言われ、イエス様が舟に乗り込まれると、風は静まって、弟子たちは非常に驚いていた。そして、直前の5000人の食事の話を引き合いに出して、『パンの出来事を理解せず、心が鈍くなっていたからである。』という言葉でしめくられています。

これが、今日の、マタイによる福音書になると、幽霊だと叫んだり、イエス様の言葉も、マルコと同じなのですが、そのあと、ペトロも水の上を歩いて、イエス様の所へ行かせてください、と頼み、少し歩くのですが、強い風に、恐ろしくなって、沈みかけます。そこでの「信仰の薄い者よ、なぜ疑ったのか」と言われ、ふたりが舟に乗り込むと、ペトロはしめくりに「本当に、あなたは神の子です。」と言って、イエス様を拝んだ、というしめくりです。

どうも、元々は、ヨハネの福音書のような、イエス様が近づいただけの話が、マルコになると、少し脚色され、今日のマタイになるともっと脚色されて、ペトロの信仰告白にまでつながる、そんな物語の発展が見られるようになった、ということらしいのです。そして問題は「湖の上」ということ。

元のヨハネによる福音書の問題の箇所「25ないし30スタディオンばかり漕ぎ出したころ、イエスが湖の上を歩いて舟に近づいて来られるのを見て、彼らは恐れた。」(6:19)という箇所なのですが、これは「湖の上」ではなく「湖畔を歩いて」と訳すこともできるらしいのです。これと同じギリシャ語を使って、ヨハネの21章では、復活した後、弟子たちはガリラヤ湖で漁をしても何も獲れないのですが、イエス様が岸に立っておられるのに気づく。」という話があるのです。

元々は、イエス様が湖に沿って、海岸を歩き、岸に近く、船で困っている弟子達に近づいて、弟子達を安心させた、という出来事が、時代が下ると、そのイエス様が水の上を歩くような話になり、幽霊のように思われたり、またペトロまで水の上を歩く、という話までエスカレートしてしまった、ということではないでしょうか。

今日の話の直前は、先週読むはずだった、5000人の人を5つのパンと2匹の魚で養った奇跡物語でした。ヨハネによる福音書などを見ると、奇跡を目撃した大勢の人が、イエス様を自分たちの王にしようとしたことが、紹介されていますが、そんな熱狂的な雰囲気避けるかのように、イエス様は山へ祈りに行かれ、弟子たちには、人びとから離れて、ガリラヤ湖の反対側に向かわそうとするわけです。

イエス様と別れて、自分たちで船を漕いで、どうしようもなくなった時、山の上から、暗い中をイエス様は湖まで下りてきて、弟子たちの舟が強風のため、ひっくり返りそうになり、岸辺の近くであえいでいるのを、イエス様も岸辺で水につかりながら、弟子たちを安心させようと、近づいてこられた。

これが大切な出来事だったのではないのでしょうか。

福音書を理解するために今日選ばれている旧約聖書で、ヨナは呑みこまれた魚の中で、祈っていますが、彼は、3節で「苦難の中で、わたしが叫ぶと 主は答えてくださった。陰府の底から、助けを求めるとわたしの声を聞いてくださった。」とっています。

これは、そのまま、今日の福音書にも当てはまります。

ヨナが呑みこまれた魚とか弟子たちの乗った船とかは、クリスチャンや教会のイメージがあって、イエス様が山に退かれたのに対して、弟子たちの船が嵐の湖の中にある、というのは、イエス様が十字架に架かった後で復活し天に昇ったあとに、この世に残された弟子たちの教会。大変な迫害を受けて、嵐の中にある教会を指しているのではないか、ということです。

イエス様が天に帰られたあと、教会はいろんな悩みの中にあるのですが、イエス様は、不可能と思われるような湖の上に現れて、「安心しなさい、わたしだ。恐れることはない。」と言われたのです。そうすると、船は助かるし、弟子のペトロまで水の上を歩いたりするんです。

弱い人間の集まりである教会は、嵐の中にある船のように、方向を見失うことがしばしばです。自分たちの経験だけを頼りに生きているなら、いつのまにか、世間の荒波に押し流されてしまうかもしれません。しかし、教会が、そして私たちひとりひとりが、「安心しなさい、わたしだ。恐れることはない。」あるいは、クリスマスの似たメッセージですが、「恐れるな。私はあなたと共にいる、インマヌエル」という確信を持つなら、ペトロが水の上を歩いたように、神様の示される道を、勇気を持って歩み出せるのではないのでしょうか。教会が、もっと御言葉に聞き、それに信頼することの大切さを教えているのが、今日の、水の上を歩く奇跡の内実のように私には思えるのです。